市史編さん便り

第 28 号　2021 年 2 月 24 日(水)発行
土佐清水市教育委員会生涯学習課
市史編さん室

令和3年土佐清水市中央公民館サークル文化展

（土佐清水市郷土史同好会企画展示）終了！

昨年から旧大津小学校の『学校日誌』「生物標本」「文集」などの学校史資料約 4000 点を「高知県学校資料を考える会」「高知城歴史博物館」「高知県ミュージアムネットワーク」「土佐清水市郷土史同好会」などの支援のもと中浜小学校２階の歴史資料スペースに当教育委員会が移動させました。

今回の展示では、これを踏まえて「土佐清水市郷土史同好会」により旧大津小学校史資料を通じてその歴史・文化・人物伝などをまとめ、企画展示しました。展示は、今月 20～23 日(土～火)の４日間にわたり中央公民館３階・多目的ホールで開催され、延べ 320 人が観覧しました。コロナ禍でもあり、昨年度と比較して観覧者数自体は減少しました。しかし、中には大津出身者や大津と関わりが深い人物もおり、熱心に展示物を見る人、懐かしいと感想を漏らす人がたくさんいました。展示初日の 20 日午前中、最後の大津小学校長上岡忠紀先生が奥様と一緒に見に来られ、展示物を観覧されました。上岡忠紀先生は、平成４年に大津小学校が閉校になったときの校長先生です。先生の大津に関する熱い思いをひしひしと感じました。

↑ボランティアガイドの会・浜田会長と吉田さん

↑岩井拓史・中央公民館長ファミリィー

←旧大津小学校の校舎
平成４年大津小学校は閉校された。校舎は、既に老朽化し、朽ち果てようとしている。昨年、校舎内に保管されていた『学校日誌』などの史資料約 4000 点を中浜小学校へ移動させた。
（ドローンによる撮影）

「市史執筆のブレイクタイム(24)」仮谷忠男（1912―1976）

本州四国連絡橋建設に尽力した建設大臣

仮谷忠男は、大正 2 年（1912）、幡多郡上灘村以布利で金之助、駒世の長男として誕生した。父の金之助は、上灘村の村会議員を務めた村の有力者であった（註1）。

清松村は、大正 13 年（1924）9 月 15 日に清水町となり、その後、昭和 16 年（1941）に上灘村を合併吸収した。忠男は、昭和 20 年（1945）7 月 5 日から 10 月 6 日まで短期間ではあるが清水町助役を務めている。終戦直後の混乱した町政であったに違いない。その後、以布利漁業組合長・県漁連副会長を経て昭和 22 年（1947）から県議会議員選挙に四期連続当選した（註2）。

特に昭和 33 年（1958）から昭和 35 年（1960）にかけて 2 期連続県議会議長を務め、当時いわゆる「教職員の勤評闘争」が激化していた。県教組は、昭和 35 年（1958）1 月 19 日に臨時大会を開催し、勤評は「民主主義を破壊するもの」として最高の実力行使も辞さない態度で阻止に当たることを決議した（註3）。

同年 6 月 26 日、朝から県下の全公立学校で教職員による一斉休暇が行われ、実力行使が実際に行使された。この全県で実施された教育界の大混乱は各所で波紋を呼んだ。土佐清水市では、一斉休暇当日に市教育委員会は臨時休校の措置を取った。これに対して、中浜小・下ノ加江小・下ノ加江中の 3 校が休校反対を表明した。特に下ノ加江小中校区では、有志会が結成され、署名を集め、ＰＴＡ解散して「父兄会」を結成した。ここで「市民の願いを聞けない教員には協力できない。子どもたちは部落で守る。」との態度を表明した。このように勤評闘争は、県教育委員会及び県下各地の市町村教育委員会・地域住民・児童生徒を巻き込み大きな波紋を呼んだ（註4）。

これを県議会議長として収拾することに努め、溝渕県政を表裏一体で忠男は支えた。こうして県政を通じて実力をつけた忠男は、国政の場にその舞台を広げる。昭和 35 年（1960）、自由民主党から総選挙に出馬した。初出馬ながら忠男は、吉田茂を抜き見事トップ当選を飾った。華々しい中央政界デビューとなった。党では、田中派に属し、その幹部として活躍し、農林や建設省の政務次官、衆議院農林水産委員長と政界のステップを一段一段順調に昇っていった（註5）。

（写真1）鹿島公園に置かれる仮谷忠男の銅像

昭和 49 年（1974）11 月、第二次田中改造内閣で国務大臣（科学技術庁長官）に推されたが、「自信がないポスト就任は無責任である」と入閣を断った。普段の柔和な表情であり、その中にも確たる意思の強さを備えていることを示した（註6）。その一か月後、再び入閣のチャンスが訪れた。三木内閣の建設大臣に就任したのである。田中内閣に替わって誕生した三木武夫内閣は、清潔で偽りのない政治の推進を唱え、経済の安定成長を目標とした。しかし、昭和 51 年（1976）から政治問題化したロッキード疑獄事件は、田中角栄前首相の逮捕にまで発展し、国民の政治不信をかったのである。

忠男が建設大臣に就任した時代の日本経済は、大混迷の様相を呈していた。前年に起こった第四次中東戦争の影響から石油危機が起こり、石油の輸入が円滑にいかなくなり、不況と同時に激し物価上昇にみまわれた。そのため四国四県にとって悲願でもあった本州四国連絡橋着工は凍結となっていた。これを打開し、四国 3 ルート時代の基礎を構築したのは、忠男の功績によるところが大きい。結果、本四架橋は児島―坂出ルート、明石―鳴門ルート、尾道―今治ルートの 3 ルートで建設が進められることになった。

昭和 50 年（1975）12 月 21 日、尾道―今治ルートの大三島橋の起工式に氷雨の降る中を出席し、その後に持病の喘息が悪化し、年が明けて 1 月 15 日、建設大臣現職中に急逝した。衆議院議員当選連続五回、行年 62 歳であった（註7）。命を投げ打ち、故郷のため、国政のために正に心血を注いだ尊い人生であった。これを称え、土佐清水市鹿島公園敷地内に忠男の銅像が置かれ（p2. 写真 1 参照）、今も日本の行末や故郷の動向を静かに見守っている。この銅像は、昭和 53 年（1978）に仮谷忠男先生顕彰事業期成会によって建てられ、銅像がカワシマサブロースタジオ・濱田浩造によって制作され、台座は小南石材店が施工し、その補助を吉本石材店が行った。

引用・参考文献

土佐清水市『土佐清水市史下巻』同、1980 年。
前田和男ほか『高知県人名辞典新版』高知新聞社、1999 年。

註

（註１）市史編纂事務局『土佐清水市史下巻』土佐清水市、1980 年、975 頁。
（註２）前田和男ほか『高知県人名辞典新版』高知新聞社、1999 年、225 頁。
（註３）昭和 33 年（1958）1 月 20 日高知新聞記事より。
（註４）昭和 33 年（1958）6 月 27 日高知新聞記事より。
　　昭和 33 年（1958）7 月 12 日高知新聞記事より。
（註５）（註２）に同じ。
（註６）（註２）に同じ。
（註７）（註２）に同じ。

【編集後記】

寒かった冬も終わり、春の兆しがあちこちで感じられるようになりました。
編集委員各位の執筆状況も時々、編さん室に報告がもたらされて、その頑張りを頼もしく感じています。秋からの市史調査も 3 月 11～12 日の出原恵三委員と大原純一調査協力員の足摺岬戦争遺跡調査が終了すれば一段落します。この日は土佐清水市郷土史同好会有志にもご協力いただきます。最後まで無事故で調査を終えたいと考えております。また、年度末少しでも市史編さん室へ一次原稿の提出をお願いします。